

不思議なご縁

第十一回生 宇野 恭章

インドから帰国して、早いもので二十年になろうとしています。私は一九九三年から九八年の五年間をカルカッタ（現コルカタ）で過ごしました。今思い出してみると「全ての物事はつながっている」ことを実感いたします。本当に「ご縁」というのは不思議なものです。私を生んだ両親を含め、どれだけ多くの人々のおかげで今の私が存在するのでしょうか。今は素直にただ感謝することしか出来ません。本当にありがとうございます。

私は留学する三年前の一九九〇年まで海外に行ったことがありませんでした。そんな私が初めて訪れた国がインドでした。その二ヶ月間の一人旅は、日本では決して経験することのない驚きの連続でした。特にベナレスのガート（川岸の階段）が印象に残ります。火葬場では死体が薪の上で焼かれています。『エネルギーの抜けた人間はただの物質なんだ。』私は痛感しました。帰国した私は友人に「お前変わったな。」と言われました。私に中で何かが変わったのです。その翌年の一九九一年私はアメリカを旅しました。全く無計画でした。ベイエリアからフロ

リダまで車で横断して、そこから一人でバスに乗りワシントンDC、ニューヨークまで。仏教とは何も関係が無さそうですが全てはつながっていました。そもそも母校龍谷大学の恩師を頼ってバークレーに行ったのですが、ひよんなことからそちらの仏教大学院を卒業してフロリダに帰るアメリカ人と珍道中をすることに。アメリカ大陸は大きく、フロリダまで毎日三〜四回給油して一週間かかりました。また英語で解釈されたアメリカの仏教に触れるのも新鮮でした。ニューヨークではスリランカ寺にお世話になりました。二年後のカルカッタでその時の私を見たというお坊さんに再会し、またお世話になりました。今考えても「ご縁」としか思えません。

一九九二年の末インドがまた近づいて来ました。私の思いが「ご縁」を呼んだのでしょうか。カルカッタ大学で博士号を取られた豪快なお坊さんがおられるので紹介したいと後輩が言うのです。その方が第二回育英生の安井隆同先生でした。わずか数回しか会ったことの無い私にカルカッタ大学の先生、現地の知人、横浜善光寺育英会を紹介してくださいました。安井先生ありがとうございます。

年が明けた一九九三年私は留学することを決意しました。しかしここからが大変でした。必要書類を揃え何度も領事館に通い、学生ビザを取得するのに半年、それからインドへ行き大学

に登録されるまでに更に半年。全てのことには時間がかかりました。これも忍辱の修行だったのです。正式に大学から証書を受け取ったのは一九九四年の三月のことです。

私は博士課程なので大学では授業がありませんでした。指導教授のチョウドリ先生はサンスクリット大学の学長になられ多忙になり、同年定年退職された先輩のガングーリ先生を紹介してくださいました。サンスクリット学者の先生はヒンドゥー教徒で、週に二回私の部屋に來られ厳しく指導をしてくださいました。普段は優しい先生を私は父のように慕っていました。インドの昼間は暑くて騒がしいので研究作業は専ら夜間に行いました。朝まで起きて昼まで寝ている私を先生はゴースト（幽霊）と呼んでいました。

私が学位論文を書き終えることを誰よりも望んでいたガングーリ先生でしたが師弟関係は僅か二年半で終わりました。いつものように明後日にまた会おうとハグをして帰られた次の日に先生は亡くなりました。あまりに突然の出来事に数ヶ月間私は混乱しました。

落ち込んでいる私を励ましてくださったのが第三回育英生である磯村（旧姓早田）啓子先生です。日本におられる先生に何度も電話をしました。早田先生には前年にカルカッタでガングーリ先生とも一緒にお会いして意気投合しました。その後もお世話になっています。早田先生ありがとうございます。

なんとか立ち直った私は本来の指導教授であるチョウドリ先生にも支えられながら何とか学位論文を提出し無事日本へ帰ることが出来ました。本当にありがとうございます。

いろいろな「ご縁」をいただきインドまで行って仏教を学びましたが、今の私は学者でも僧侶でもなく、何の肩書きもないただの会社員です。この私ですらここにまだ書き切れない「ご縁」があります。「ご縁」も目に見えません。心で感じるものです。前向きな自分の意思がないと成立しないものかもしれません。人は無意識に自分の理想を求めている筈です。そしてエネルギーが抜けるとただの物質になります。後十年で私はガンジー先生の亡くなった歳になります。今でも先生の授業は私の中ではかけがえの無い時間でした。先生の写真は感謝の気持ちを持って何時も見えるところに飾っています。